

---

# 若社長（仮題）

ごはんライス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

若社長（仮題）

### 【著者名】

じほんライス

### 【あらすじ】

タイトルはまた変えるかも。 20枚です。

アメリカ帰りの若社長は、若いくせにヒゲを生やしている。とんだ  
カツコツケヤローだ。

ただ、仕事は確かにデキる。社長が就任してからわずか一年で社員の所得が1・2倍になった。

だけど、オレは気に入らないのだ。オレの彼女にちよつかい出してきやがる。彼女は彼女で「かつこいいねえ。若社長へ」なんてうつとりしてやがる。

き・に・く・わ・な・い。

オレは、若社長が彼女とホテルから出てきたといつ噂を聞いたとき、ぶつ殺すことに決めた。

まず、落とし穴というアイデアがある。

若社長は毎朝ジョギングをしてるといつ。

そのコースのどつかに落とし穴を掘つてはめてやろうひきゅうわけだ。

電気ドリルでアスファルトを掘つてたら、水道管を割つてしまつた。

噴き出る水。

「はつはつ。あつ山本くん。おはよう」「しゃ社長。おはよびざります」

「水浴びかい? 朝から元気だね。んじゅ。はつはつ」

オレはびしょ濡れになり、風邪を引き、その日会社を休んだ。

その夜、  
彼女が看病に来てくれた。

べツの上で、作つてもうつたおかゆを食べながら、若社長の話になる。

ふりおくん 今日商談かあつたでしょ あれまとめたわよ。三億円の利益が見込めるよつよ

長は簡単にまとめた。

才能の差に何とかいたへく  
心を殺したい

「んで、A社と共同開発の例の件ね。プロジェクトチームのリードはふりおくんにするつて若社長言つてたわ。ふりおくん、最近がんばつてるからせひつて」

おまえ、いつまでも、絵で書いたように優しい上司」という設定が実際にいらつて。ぶち殺さうとしてるオレがまるでダメな部下のようではないか。

んでね、ふりおちやん、話

15

卷之三

沈黙が部屋を支配する。  
実に気まずい。

「今すぐ答えなくていいって言つてたナビ、もちろん、断るつもりよ。あたしにはぶりおくんがいるもん」

「しかし。口々華。お前、若社長とホテルに

同上。二。母子關係之問題。

翌週、オレに辞令が下った。北極支社に転勤である。きっと、口

リ華が若社長に若社長にとって気に食わない返事をしたに違いない。

北極はしじんべんが凍つてひいらぎのやうにならひこんで。

たちの悪いことに、北極支社は氷でできている。吹き荒れる風に雪。真っ暗だ。寒い。ほんまに寒い。鼻水も凍る。

ただ支社の中は意外にあつたかい。

「ふりおくん。この書類、コピーして

「わかりました」

「それと」

「はい」

「今晚、白熊ちゃんに行こうぜ」

白熊ちゃんといふのは、北極にある風俗店だ。

まだ行つたことがないので、どういつとかわからない。ロリ華と会えないし、まあいかと課長の誘いを受けた。

仕事が終わり、外に出て、氷の車に乗り込む。透けてて中丸見え。かつこいいけど、ちょっと恥ずかしい。けど誰も見てやしないのでまあいい。

すごい風と雪の中を走つていいく。道などない。

数時間たち（遠いな！）すでに、深夜の12時。白熊ちゃんに着いた。

白熊ちゃんは、やはり氷でできていた。

「まあ入つてみよう。どんなところかな」

「え。課長。常連じゃないんすか」

「初めてだよ」

何かいやな予感がするなあと思つて、ドアを開ける。誰もいない。

「おーい。おーい

返事なし。

ふりおと課長は、正面のドアに看板があるのを見つめた。  
じづ書かれてあつた。

「うーん。いらっしゃいました。まずは、着ている服などを籠に入れてください。

「お。なんだ。すでに始まつてるやん」

「は、はあ」

「ふりおはいやな予感がしてならない。なんか知らないけど、小学生のときの国語の教科書が頭に浮かんだ。」

「脱いだ。脱いだ」

課長はやる気満々でホールやらパンツやら靴下やら、ドアの前にある力方に放り込んだ。ふりおも仕方なしに脱いだ。

「うはあ。寒いなあ。早くプレイしたいね」

ドアの隣に矢印があつたのでそつちに進む。するとまたドアがあり、そこにも看板があり、いつ書かれてあつた。

寒いでしょ。ここにクリーミーがあるので全身に塗つてください。

「うわあ。気が利いてる。これもプレイの一つなのかね」

課長はアホなので気づいてないが、ふりおはもうわかった。

「か、課長。逃げましょ」

「なんで？」

その瞬間、ドアが開き、巨大な白熊が数匹飛び出した。

「あわわわわ。でかい」

「ひいいいい」

白熊が叫んだ。

「つまそうなやつらだ。ちよつと出番は早かつたがばれちまつたものはしようがない。お前らはわざりに食われるのだ」

「ひいいいい」

ふりおと課長は抱き合つた。がたがたがたがた震えていた。

「助けてくださいーい」

「いいや。ならん」

「おかあちゃん」

外では雪が吹き荒れていた。

課長とふりおは、結局、白熊たちに食われた。

若社長はその知らせを受け、「つむ。これはチャンスだ」と思った。今なら口リ華くんをゲットできるチャンスではないか、と。口リ華は悲しみに暮れていた。そりやそりや。いざれば結婚する約束だつてしていたわけである。

口リ華は首吊り自殺した。

その知らせを受け、若社長はびっくり仰天した。「な、なんてことだ！！！」

若社長も悲しみに暮れた。部屋に帰るとわんわん泣いた。オレも自殺してしまおうか。しかし、そうすると仕事が。会社も軌道に乗つてきたのに、今死ぬとなると。しかし、口リ華くんがいないなら死んでしまいたい。

若社長は苦惱した。

天国で口リ華とふりおは幸せに暮らしていた。

「ふりちゃん。こはんできたよー」

「やつたー」

「一人で食べる」はんは最高だ。

ふりおは、天国株式会社に勤務している。

若社長は、ぐだぐだ悩んでいてもしょうがない。

部下に命じ、口リ華そつくりのロボットを作ることにした。製作費用はオレのポケットマネーでいくらでも出す。しかし、部下はうちの会社はそういう会社じゃありませんと言つので、仕方なしに若社長は、丘の上にあるメンマ博士の研究所に足を運んだ。

「こへりぐれますか

「そうそな。これでどうだらう

若社長は指を三本出した。

「さ、三億！！」

「違う。三十億だ」

もうひん、メンマ博士は云々受けた。

メンマ博士はそれから一週間くらいでロリ華ロボットを作った。メンマ博士くらいベテランだとラクショーン。

いよいよ、ロリ華ロボットのスイッチをオンにした。  
ウイイイイイイイ。

実験台の上で、ロリ華ロボットはゆっくり皿を開けた。

「うー、こひばどこのの」

「おや目覚めたね」

メンマ博士は、ロリ華ロボットのあまりの美しさに、ロボのおひばりもん地獄になってしまった。

「いやん…やめて…おじこちやん…」

「ははは。ロリ華ロボ。ロリ華ロボ」

ロリ華ロボットは露骨にいやな顔をした。

ひとまず、メンマ博士の頭を叩いた。

「いててて。いいか。ロリ華ロボ。お前はこれから若社長の家に住むのだ」

「どんな人？」

「若くてイケ面で会社の社長だよ」

「わーステキ」

ロリ華ロボはガツツポーズをとった。

「おお。美しい」「

「えへへへへ」

ロリ華ロボットは若社長の部屋に届けられた。といつよりメンマ博士に地図を書いてもらひて勝手に歩いてきたのだが（メンマ博士はただいまグアム）

「社長だけあって、なかなか広い部屋だねえ」「

「えへへへへ」

若社長照れてる。かわいい。と思ひロリ華ロボット。

若社長はギューアーってしていいかいと言ひ。ロリ華ロボットはいいよと言ひ。

「ああ。幸せ。ロボットなのにかたくないね」

「そういう材質なの。30億も出せばそれくらい作れるよ。そんなにロリ華って子が好きだったの？」

「ああ」

ロリ華ロボットはちよつとカチンときた。ロリ華ロボットは見た目はロリ華だが中身は別である。しかも、さつきから本人気づいてないけど、若社長にちょっと恋してる。

「なんか作つてあげるよ。中華と和食と洋食、どれがいい？」

「和食。うれしいなあ」

「じゃあ、冷蔵庫にあるやつ使つね」

ロリ華ロボットは料理もできる。そういう機能もついている。

冷蔵庫を開けるがろくなの入つてない。

「若社長。買い物に行こう」

「えつ」

二人は腕を組んで外に出た。



口リ華ロボットはむちゅかわいいので、みんなが振り向く。フローモン機能もあるのだ。若社長はちょっと嫉妬まじり、ちょっと誇らしい。不思議な気分。

スーパーに入る。若社長は社長だけに、松阪牛の肉をカゴに入れようとした。ロリ華ロボットはぜいたくはだめと黙つて、和牛のちょっと安いやつをカゴに入れる。

若社長はこの子が嫁さんになつたら節約できるなあと感心する。でもロボットだからなあとちょっと残念な気持ちにもなる。  
二人は買い物を終え、外に出る。「おいしいの作るね」「うん。あ  
りがと」

二人は腕を組んで実に幸せそうだ。

その頃、天国でロリ華とふりおが大喧嘩をしていた。

「浮氣したでしょー何よーこの襟首の口紅！」

「つるせえー男なら浮氣の一つやー一つするわー！」

ロリ華は怒つて、家を飛び出した。

雲の上をとぼとぼ歩く。あたしどうしたらいいんだろ？

前から、怪しいおつさんが歩いてきた。汚い格好をしてる。

「へつべ。ひょつとして天国がいやになつちまつたのかい

「だ、誰！」

「へつべ。わしゃ、闇の業者さ。天国の住人を天使にナイショで地上に送る仕事をしてゐる」

「ええつ」

聞けば、おつさんは単に天使にいやがらせをしたいからしてるだけでお金はいらないと言つ。

「なんで天使にいやがらせをしたいの」

「まあそれは聞かないでくれ」

ライスが考えてないだけだろうか。

お嬢ちゃん、おもかげいいするよ

「わかったわ。お願いします」

「シテ」

おつさんは口り華を持ち上げた。

ГИДЫ

口華を

「あやあああああああああ落トする口コ華。」

一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十

ここから少しエロな描写をするので、15歳以下の子は読まないよ  
うにして下さい。

口リ華ロボットはそこも最高であった。さすが30億。抜かりはない。

若社長はベッドの上で散々ロリ華ロボットのボディを楽しんだ。最高級のダッヂワーフだ。「あんーあんーあんー」「おうーおうーおうー」

若社長は行為が終わつたあと、ロリ華ロボットのそこからオナホールを外し、流しで洗つた。妊娠が無理なのが残念だなと思つ。

その頃、田を覚ましたロリ華は、ゴミ捨て場で寝ていた。「いてて

てて。地上かな、ここは」

すでに朝。向こうから誰かゴミ袋を持って歩いてきた。

「あ

「げ

何と、こきなつ、ロリ華とロリ華ロボットのいの一番である。早つー。

その頃、ふりおは天国で包丁を振り回して暴れていた。止めに入る天使が次々と斬り殺される。「てめえら！ロリ華をどこに隠した！」雲に散らばる天使の腕や内臓や脳……すでに169名の天使が犠牲になつている。

一方でロリ華はロリ華ロボットの案内で若社長の部屋に行つた。ロリ華は若社長と結婚しようと思つて地上に来たのに若社長はロリ華ロボットの方がいいと言つてロリ華を追い出した。

ロリ華はどうしていいかわからず、包丁を振り回して街で大暴れした。

次々に斬り殺される人々。「ちきしょう…ちきしょう…」

すでに158名が犠牲になつてゐる。

「169対158。いい試合ですねえ。豚の海さんはこの試合、どちらが勝つと思われますか」

「ぼく、相撲の解説がしたいよう

わあああああああ。

スタジアムには巨大なスクリーン。片方は天国の様子。片方は地上。観客は興奮していた。

「やれ！やれ！ふりお！殺せ！」

「ロリ華ちゃん、がんばって！ファイト！」

すでにふりおによる天使の死者数、286名。ロリ華による地上人の死者数、298名。えらいことになつてゐる。

ロリ華が勝つか、ふりおが勝つか。

結局のところ、ふりおと口リ華は地獄に送られた。

「行つてくるよ」

「いつてらつしゃい」

ふりおは地獄株式会社に勤務することになった。

若社長と口リ華ロボットは幸せな日々を過ごしていた。

「もぐもぐ。口リ華ロボットの作る料理は皿になあ。オレ、幸せ」「あたしも若社長といつしょにこはん食べられて幸せ。もぐもぐ」  
ただ、若社長にも一つ懸念があった。会社の跡継ぎをどうしようつてことだ。口リ華ロボットはロボットゆえに子供が産めない。

1.1(前書き)

温泉に行かないか?ロリ華。(たけし)

ロリ華ロボットは、メンマ博士のところへ行った。

「博士！若社長とあたしの間に子供ができるよって言ってください…」

「難しいこと言ひねえ」

メンマ博士は腕を組む。

「子供のロボットなら作れるナビ

「本物の子供がほしいです！！！」

メンマ博士はどうしていいかわからない。メンマ博士は天才だが、課題が難しそうである。人間とロボットの子供。

「一つだけ方法がある」

「なんですか！」

「ピノッキオ方式じゃ」

ピノッキオとはイタリアの物語で、木の人形たるピノッキオが最後女神様に人間の男の子にしてもうつとうつ話だ。

「どういうこと？？」

「つまり、神の力を借りるしかない」とゆうことじゅうな

「はあ」

「よしわかった。今から神様に電話してみよう  
ふるるるるる。

「はー。神やけど

「もしもし。はじめまして。メンマと申します。趣味はスイカ割り  
です

「何の用だ」

メンマ博士は説明した。

「ふうむ。人間とロボットの子供ねえ」

「何とかなりませぬか

「いくらぐれむ？」

「え」

「ただではやりさん

「なんやうな

メンマ博士は若社長でひつた30億をほとんど使ってしまった。

「二、一億くらいな

「そんな安くちやねえ。最低30億はいるねえ

メンマ博士は困ってしまった。

「しょ、少々お待ちを

いつたん電話を切り、メンマ博士は若社長に電話して事情を話した。

「マジですか。しかし、ほくもうポケットマネーないんですよねえ。

困ったなあ

「困りましたなあ

ロリ華ロボットは泣きわざである。

## 11（後書き）

あなた、今、刑務所でしょ！（口リ華）

若社長はガムシャラに働いた。何とかして30億を手に入れないと  
いけない。焦りに焦つた。

その焦りが判断能力を鈍らせた。アメリカンサークルの宇宙人捕  
獲事業が100億の利益が見込めるというのでうつかり手を出して  
しまい、事業団が倒産。若社長の会社が60億の負債を抱え込んで  
しまった。

若社長はやむをえず、100人をリストラ。  
リストラされた人たちが通り魔団を結成し、街で包丁を振り回し暴  
れまくつた。

「うぎやあああああ

「逃げろー」

「うわああああ

通り魔団はやる気があるので警官が撃つても全然効かない。爆弾投  
げても効かない。内臓がはみ出したまま暴れてる団員もいる。

警察は埒があかず、地獄の口利華とふりおに出動依頼をした。通り  
魔団には通り魔のエキスパートを。毒をもって毒を制するという発  
想。

しかし、ふりおと口利華は地獄で幸せに暮らしていた。あまり、そ  
ういうことをしたくない。

しかし、地獄株式会社の上司に「警察の要請を受けなければ解雇する」と社長に言われた」と言われた。

口リ華に話したら、じゃあしうがないわね、といふことで、二人はマシンガン、日本刀、手榴弾、包丁なども装備し、エレベーターで地上へ上った。

街では通り魔団が派手に暴れまわっていた。今月に入り、すでに三万人を越す犠牲者が出ている。

街のいたところで死体が転がっている。

あ。口リ華口ボットと若社長が逃げ回ってる。

若社長が通り魔の一人に捕まつた。

若社長は腹を包丁で刺された。「うぎゅあああああああ

口リ華口ボットは尻餅をついてがたがた震えている。

そして、若社長は拳銃で頭を撃ち抜かれた。はじける頭。飛び散る脳ミソ。

口リ華口ボットは怒つて、通り魔に突進した。通り魔は発砲した。しかし、口リ華口ボットはロボットなので、ボディ硬化機能が作動し、弾を跳ね返した。

そして、素手で通り魔を殴つた。パワーが百倍になつてあり、通り魔は一発で倒れた。

しかし、すぐに次の通り魔が現れて、口リ華口ボットを取り囲んだ。

「ぐるるるる

「うがががが

通り魔たちは目が血走つており、よだれを垂らしている。口リ華口ボットは怖くて怖くてついパニックになり、口の裏に内蔵された自爆スイッチを舌で押してしまつた。

「うどおおおおおおおおん。

自爆機能は原爆並みの破壊力があり、プリン市は壊滅的な状態になつた。

推定死者数268万5000人。日本史上、最悪の事態に発展した。

無論、口リ華とふりおは幽霊なので何ともなかつた。

口リ華とふりおは再び元の幸せな地獄生活に戻った。

以前と違うところはお隣に若社長と口リ華口ボットが住んでる点だ。ふりおはたまに口リ華と口リ華口ボットを間違えそうになる。

会社帰宅中、エコバックを自転車に乗せて歩いて歩いてる口リ華が歩いてるので「おーい。口リ華ー」と手を振ると「ふりさん。あたし、口リ華口ボットよ」という返事。顔が赤くなるふりお。やうにくくつてしまふ。

しかも若社長は仕事がデキる。地獄株式会社に入社して数ヶ月で課長。すでにふりおの上司。

しかも、口リ華が若社長と不倫。ふりおも反動で口リ華口ボット不倫。ややこしい。だいたい若社長も社長じゃないのにおかしいな。以後は課長と呼ぼう。

課長はある日、出張だと口リ華口ボットにつれて、口リ華と海の見えるレストランで食事をしていた。ふりおも口リ華に出張だとうそをついて、口リ華口ボットとペルの最上階にあるレストランで食事をしていた。何だか不思議な感じである。

それはともかくとして、作者「はんライス」には彼女がない。現在34歳であるが、彼女いない歴34年である。えっへん。威張ればいいつてものじゃない。

20代の頃は何かを成すまでは女禁止と決めたのでまあ疑問を感じつつも何とかやってこられたが、さすがにこの歳になると不安になつてくる。このまま一生彼女を作らずに死んでしまうのではないか。ただ何かというのがまだ達成できていない。今のところ、何かというのは小説をプロとして何十年も続けることである。

小説を書き初めて数年、いまだアマチュア。なかなか彼女を作ることができない。

バイトなので結婚なんて夢のそのまた夢の話。

口リ華というのはそんなオレの憧れの子かもしれない。こんな彼女がいたらしいなあという想いがつまつてる。

オレが今まで見てきた女の子が混ざつてできた子が口リ華なので、実際にこういう子はいないのだが。

口リ華ロボットについては……これは下ネタになるのでやめておこう。児童書でエロネタはいけない。カトちゃんのちょっとだけよみたいな、かわいいエロネタはいいけどね、アダルトなエロネタをゴールデンで放映してはいけない。深夜帯ならいいけど。

しかし、今の流れからすると、しばらくは彼女が作られないなあ。とほほほである。

何だかなあという感じである。

どうしたもんかなあという感じである。

ともかく嘆いていても何も解決しない。小説を書いていくしかない。しかし、正直きつい。特に所得がやばい。生活が相当苦しい。

自己責任は認めるが、多少企業も雇用責任を果たしてくれないときつくなあ。

今の社会システムは、どうしても弱者が痛い目にあうようになります。こいつはまずい。

社会改革。これも今後の課題。自己改革と並行してやってく。とにかく不安である。不安でいっぱいである。逃げれば逃げるほど追いかけてくる。不安が増幅する。

受け入れるのが大事かもしない。こんなもんじやい、よし、行きい、みたいな。

悲観と楽観を行ったり来たり。あるいは時に傍観。あるいは、そのどれでもない。

ビートルズのよしひな。

あれは実に上手くできたバンド。

ジョン（悲観ミージシャン）が楽曲にわざび的な厳しさを加え、引き締める。ポール（樂観ミージシャン）が楽曲に砂糖的な甘さを加え、マイルドにする。それを傍観するジョージが達觀性、渋さを曲につぶれる。

最後に陽気なリングが見事なドラミングで曲を支える。

ジョンだけだと暴力的だ。女の子のリスナーがつかない。ポールだけだとアマチャんで、男子のリスナーがつかない。ジョージだけだと地味すぎて、ビッグになれない。リングは陽気で氣のいい男だけど、さすがにドラマ一だけじゃバンドは成立しない。

いいバランスのバンドだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7553n/>

若社長（仮題）

2010年10月8日12時15分発行